

育児と介護の同時負担が家族に及ぼす影響

- 母娘関係に焦点を当てて -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター

本研究では、これまであまり注目されてこなかった高齢者介護をしている母親とその娘の関係性に焦点を当て、そこに介護という要因が加わる事でそれはどのようなプロセスを経るのか、またそこで娘に起こりうる臨床的課題とはどのようなものかについて考察を加え、心理臨床学的援助における母娘関係の新たな視点を示唆する事を目的とした。

近年の女性の社会進出に伴って、女性にとって結婚の必要性が弱まり、その結果急激な未婚化・晩婚化が進んだ。こうした結婚を急がない晩婚化は、同時に晩産化の一因ともなっている。また女性は男性よりも長寿化しており、高齢者の中での女性の割合は多くなる一方で、主な介護者の割合を要介護者の続柄から見ると、その総数は女性 72.2%、男性 19.5%と女性が圧倒的に多い。このように社会で晩産化と高齢化が進行する中で、育児と介護を同時に負担するという家庭が増えてきている。しかしそうした家庭はまだ少数派であるために、様々な困難や孤独感にさらされており、特に母親が介護をしている事の育児への影響は、こうした家庭に独自の悩みである。

そこで、母親が介護をしている事が子どもに影響を及ぼす可能性があるかどうか、事例研究から探ってみたところ、息子よりも娘のほうが影響をうける可能性が高い母親は娘をコントロールしようとする娘は女性性を否定している、あるいは確立できていない娘には強迫性(完ぺき主義)がある母親の変化が娘の変化のきっかけとなるという仮説が導かれた。よって、本研究では母娘関係に焦点を当て、仮説生成を目的とした質的研究を行うこととし、その際に本研究では語りをどのように捉えているかについても述べた。

データは、母親が介護をするのを見て育った当事者の方に協力していただき、主に面接による語りデータ収集した。分析は、意味的なまとまりを語りデータから抽出し、KJ法に準拠していくつかの自己物語的カテゴリーを生成した上で、カテゴリー間の関係を質的に考察した。すると、語りの中心となっている協力者の「介護が終わって欲しい」という気持ちは、自分のために願う母親のために願うという質の異なる二つの想いに分けられた事から、その間をターニングポイントとして特定し、何故そうした変化が生じたのかについて質的に分析を行い、それをもとに母娘関係を分析した。

その結果介護には、母親が娘に発する無意識のメッセージ、すなわち他人の要求を機敏に察知するための情緒のアンテナを発達させ、自分自身の要求を二の次にすることを学ばなければいけないというメッセージを、より強力にする作用があり、また、娘は母親を求める気持ちから介護の終わり(=被介護者の死)を望んでしまうため、罪悪感を抱いてしまう可能性があることが分かった。この罪悪感は娘が母親から分離することができれば消

滅する。しかし自己を確立し、母親の人生を対象化した後でも、母親の人生は介護のせいで幸せではないと感じれば、娘は再び介護の終わりを願ってしまうため、第二の罪悪感が生じることとなる。娘がそれを消し去るには、母親が自分の人生を自分で充実させようとする必要があるであった。

また、協力者はこれまで誰にも打ち明けることが出来ずにいた、介護に対する想いを、本研究をきっかけとして初めて語っている。その語りは彼女にとってどのような意味があったかについて考察を加える事も、心理臨床的な立場から重要な事であると思われる。そして最後にはさらなる事例の研究と、こうした母娘に対する支援の必要性を述べ、今後の課題とした。